伝統芸能の精神性—主として能—

角井　宏

日本の代表的な伝統芸能の一つである能は、一種の仮面劇である。この面を冠る役者は、神・精霊・怨霊・死者の類で、生きている人は決して面を冠らない。つまり、この劇は霊と人との対話であって、現実社会の物語ではない。それにも関わらず、能が人の心を打つのは、仮面を付けた霊が人間の請神に潜む不安や疑惑や歓喜や悲哀をえぐり出して涙や笑いを誘うからであろう。

それに能は幽玄を尊び、動きを単純化して写実より様式化に努力する、世界でも珍しい演劇である。其の結果観客は、自分の想像力をかき立てられ、目をみはり、耳を澄まして観能する。第三の特徴は、美しい衣装や優れた技（舞・声・音曲）が常に一級を目指し、真善美聖を求める観客の憧憬を誘うのである。

能の説明に必ず出てくる幽玄の味と言う言葉を漢語に翻訳すると優美艶麗ということになるが、優美艶麗ではつややか過ぎて、また、見えすぎて優美艶麗以上の何かが表現できていない様な気がする。曖昧の雲を通して日本人の審美眼が発掘する美的映像なのではないかと私は思う。日本人の文化的特性としてわび・さびを尊ぶとか、『もののあわれ』を知るとかいわれるが、これらも、能の幽玄の感じかたに一脈通ずるものがある。つまり日本人は黒白を明らかにせず、あるがままの自然を飲み込む曖昧さが驚くべき包容力と審美眼を発揮し、一方では本音と建て前の使い分けといった国際的不評の種となるしたたかさを培っている。

この幽玄の味を能のものにしたのは、能の創始者といわれている役者観阿弥・世阿弥親子である。この天才役者はいまから六百数十年前（足利幕府の義満将軍が観阿弥の能を見たのが西暦1374年）大和猿楽の一座（結崎座）に出現して、猿楽に当時流行していた田楽・神楽・曲舞等の魅力をとりいれ、能を開発したのであるが、幽玄の味は官能的な女性美の表現に力点を置いた近江猿楽の曲舞が世阿弥の革新的創作意欲を刺激した結果であるともいわれている。

以来六百年、接客用演芸として繰り返し演ぜられることによってプロ芸術としてますます洗練されたという側面と客を招いた主人自身が自ら主役（シテ）を自演するためのアマチュア芸術という側面とがある。

能は接客演芸なる故に客への思いやりとして汚猥（下品）を嫌う精神性と芸術性の高さとを保ち、他方素人が自演できるように単純化された演技及びその演技を習得するためのお稽古の組織＝家元制度が能の永続的な生存を助けているという関係は不思議な知恵というほかない。

能は四百年前イエズス会の宣教師によって仏教の宗教劇としてローマ法王庁に報告されているそうであるが、それは、日本人の精神に仏教の影響が強く反映しているからであって、能が仏教の布教劇であるわけではない。仏教劇といわれる理由のひとつは、霊界を扱った曲が多く、配役に仏僧が出てくるからであるが、この配役は物語の導入を助けるピエロ的ワキ役が多く、このワキ役は仏僧のみではなく、神官や里人（さとびと）であることもある。

仏教劇の証拠として挙げられる因果応報（いんがおうほう）とか、輪廻転生（りんねてんし

ょう）とかも、仏教固有の宗教観ではない。『親孝行息子が湖辺の妖清から湧いて尽きない酒壺をもらう中国の説話（狸々—しょうじょう）』や、『魚を捕ることを楽しんだ鵜匠が死後地獄の責苦を受ける話（鵜飼—うがい）』も日本人は普遍の道徳話として把握している。

能ほど後世の日本文化や伝統芸能に強い影響を与えたものは少ない。中でも歌舞伎の所作事（しょさごと）は、能の「道成寺（どうじょうじ）』や『石橋（しゃっきょう）』の趣向をとりいれた舞踊劇であり、文楽の語りである浄瑠璃（じょうるり）は、謡曲を平家琵琶で語ったものである。江戸時代に文楽と歌舞伎を大成させた近松門左衛門は、能の『俊寛（しゅんかん）』から『平家女護島（へいけにょうごがしま）』をつくり、能の『景清（かげきよ）』から『出世景清（しゅっせかげきよ）』を書いて、歌舞伎や文楽を重厚で本格的な演劇に育て上げたのである。

文楽や歌舞伎のみではなく、能は地唄の歌謡にも幅広く取り入れられ、その発達が地唄の伴奏曲であった三曲（箏・三味線・尺八曲）の洗練に一役も二役も買って、これらを今日の押しも押されもせぬ芸術にまで高めた。さらに茶菓道に対しても能は少なからぬ影響を与えている。茶菓道の作法、とくに歩き方は、能の所作に発していると言われる。このように能が日本の伝統芸能に与えた影響は尋常ではない。

能は、芸能ばかりでなく、現代日本語の創成にも貢献しているという。創成といったのは現代日本語が自然発生語ではなく、明治維新政府が人工的に作った標準語だからである。標準語は東京弁ではなく、維新政府を作った薩摩・長州、土佐・肥前の何れの藩の言葉でもない。江戸時代の武士の教養であったが故に、日本全国各藩の士は能の語り（会話）に用いられた言葉は解し得た。そこで、維新政府は、能の語り言葉を基礎に全国共通の標準語を作成したというのである。